

## 15 生殖医療センター



生殖医療センターは、平成25年4月に発足し、生殖医療を専門とする産婦人科医、泌尿器科医、看護師と、精子・卵子・受精卵を扱う胚培養士が連携して治療にあっている。産科婦人科外来にあった生殖医療センターは、平成28年12月より8号館3階の旧内視鏡センター跡に新たに開設され、これにより健診に来院される妊婦さんと待合室を分けることが可能となり、不妊患者さんに余計なストレスを感じさせることなく、最先端の技術を含む生殖医療を提供している。また、診察室を3室、内診室2室、精液を採取するメンズルームを2室設け、外来担当医を終日2人配置して、予約時間通りに診療できるよう努めている。

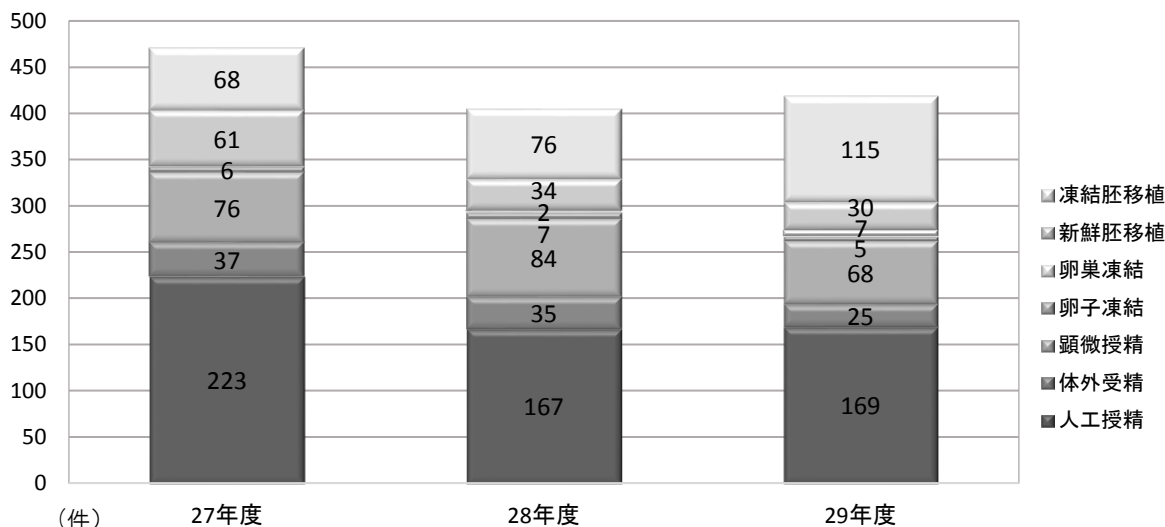
大学病院のため合併症のある患者さんの不妊治療症例が多いのが特徴であるが、高齢から若年齢の不妊患者さんまで幅広く診療している。生殖補助医療では、採卵数には昨年と著変がないが、凍結・融解胚移植数が前年比151%と増加している。人工授精の数はほぼ横ばいである。また多発子宮筋腫、子宮内膜症などの不妊原因となりうる器質性疾患を有する患者さんに対しては、腹腔鏡や子宮鏡などの内視鏡手術を中心とした手術療法を実施しており、一定の治療効果を認めている。さらに、29年度に導入された卵管鏡手術装置を用いて卵管性不妊の患者さんの自然妊娠の可能性を高めるべく診療にあっている。

また、平成28年1月にがん治療医と生殖医療医の密な連携を目的とした「兵庫県がん生殖医療ネットワーク」を設立し、当院がその中核を担っている。日本産科婦人科学会の倫理委員会の承認のもと、若年がん患者さんのがん治療前に卵子・胚・卵巣組織を凍結保存し妊孕性温存治療を実施している。

生殖医療センター開設後、生殖補助医療による高齢妊娠例も多数経験している。高齢の周産期管理はリスクが高く、当院周産期センターと連携をとり対応している。年齢の上昇に伴い増加する胎児染色体異常症を心配される妊婦さんに対しては、当院の出生前診療外来で遺伝カウンセリングを受けて頂いている。

さらに、妊娠は成立するものの流産を繰り返してしまう不育症患者さんの診療も積極的に行っており、受診者数は前年比150%であった。診療ではガイドラインに則った標準的医療に加え、研究成績に基づいた検査・治療も導入し、世界に先駆けた診断・治療を目指して診療を行っている。

15-1 年度別人工授精・体外受精・顕微授精・卵子凍結・卵巣凍結・胚移植（新鮮・凍結）（合計419件）



※28年度より卵子凍結と卵巣凍結の項目を追加。

15-2 年度別新規患者数（合計148人）

